

STRING THEM ALONG

ストリング・ゼム・アロング

文=ジョージ・カックル

第9回

“髪の毛”に見る時代の様相

2013年11月号の「アメリカン・ロック・リリック・ランドスケープ」で、クロスビー・ステイルス・ナッシュ&ヤングの「オールモスト・カット・マイ・ヘア」の歌詞について紹介した。俺はほかに髪の毛についての曲がないかと調べたが、不思議にそれほどなくて、ちよつとがっかりだった。ロング・ヘアとロックにはすごく深い絆があると思っていたからだ。俺にとっては重要なテーマだったが、社会にとっては取り立てて歌詞にするほどのことじゃなかったのかもしれない。今回は、そのほんのわずかの曲をいくつか並べてみた。

カナダのオタワで結成されたファイヴ・マン・エレクトリカル・バンドが71年にリリースした全米3位のヒットとなった「サインズ」については13年11月号でも軽く触れたが、ここでもう少し細かく話そう。実はこの曲は、人生の中にはたくさん様々な標識 (signs) があることを歌っている。これをしなさい、これをしてはいけない、などなど。曲の1行目はこんなふうになっている。'And the sign said long-haired freaky people need not apply'。髪の毛が長いような尋常でない人は申し込めない



Five Man Electrical Band
"Good-Byes & Butterflies"
Lionel [US] ● LRS1100 [1970]
incl. 'Signs'

と看板に書いてあった。そこで主人公は、長い髪の毛を帽子の中に隠して仕事を申し込む。すると、担当者が言う。'You look like a fine up standing young man. I think you'll do.' あなたは正しい若者に見えるから、雇いましょう。ここで主人公は帽子を取って、ひと言。'Imagine that me workin' for you.' 想像してみなよ、俺があんたの下で働くってことを。'You're where a sign, do this don't do that, can't you read the sign?' 標識、標識、どうして見ても標識。これをやれ、これをやるな、標識が読めないのか？ 髪の毛を通して、規制だらけの社会を皮肉っぽく描いている。次のヴァースには、こんな歌詞が続く。'And the sign said anyone caught trespassing will be shot on sight.' 不法侵入したら、撃たれます。入ることを禁ずる

看板 (sign) がフェンスに掛けられており、その向こうには恐らく自然が広がっているのだろう。この看板は僕を入れないためにあるのか、それとも自然を閉じ込めるためにあるのか。曲の主人公は問いかける。

この「サインズ」の歌詞を聞いていると、ウディ・ガスリーの名曲「この国は君の国 (This Land Is Your Land)」を思い出す。その歌詞には、「私有地」と記された看板があったがその裏には何も書いてない、だから看板の向こう側の土地は僕らのものと歌う部分がある。この曲はアメリカの学校で必ず歌われるが、子供たちが歌うヴァージョンでは、この部分の歌詞が削除されている。社会主義を讀んでいると判断されたために外されてしまったんだ。

スコットランドのバンド・ナザレスは、75年にリリースしたエヴァリー・ブラザーズのヒット曲のカヴァー・シングル「ラヴ・ハーツ」が全米チャートの8位にまで達し、スターの仲間入りを果たした。この曲は、彼らの6枚目のアルバム『ヘア・オブ・ザ・ドッグ』のアメリカ盤にも収録されたため、その米国盤LPもチャートの17位まで上がった。日本盤のタイトルは『人食



Nazareth
"Hair Of The Dog"
A&M [US] ● SP4511 [1975]
incl. Salvo [UK] ● SALVOC035
incl. 'Hair Of The Dog'

い犬」だが、どうしてこのように訳したのだろうか。これは完璧な誤りだ。'hair of the dog'の直訳は「犬の毛」。英語の格言でもあり、日本語に訳すと「迎え酒」となる。きつと、このアルバムのジャケットに何匹か狼みたいな化け物が描いてあるの、日本語タイトルを『人食い犬』にしたんだろう。この 'hair of the dog' は、もし狂犬病の犬に噛まれたら、その犬の毛を傷口に入れれば、悪い結果を防げるという格言。それが、二日酔いの症状を和らげるために飲む酒「迎え酒」というふうに使われるようになった。

では、このアルバムのタイトル曲「ヘア・オブ・ザ・ドッグ」の内容に入ろう。歌詞が非常に少ない曲だが、歌われているのは自分の欲望の赴くままに男を誘惑する女性に惚れた男のグチ。コーラス部分で、'Now you're messin' with a son of a

bitch.' お前は今、ろくでなしの俺と付き合っているんだぜ、と歌われ、それなお前は俺だけを見つめてくれない、俺はお前以外に何も目に入らないのに、というふうが続く。何度も何度も繰り返される 'son of a bitch' の 'bitch' は、正確には発情期の雌犬のこと。だから「発情期の雌犬の子供」という表現は、かなりひどいものなんだ。しかし、友人に向かって親しみを込めて使う場合もある。不思議だが、この曲の歌詞には 'hair of the dog' の文字がどこにもない。アルバムの他の曲にも見つけられなかった。変だと思っただけなら、こんな事実が分かった。バンドはもともとこのアルバムのタイトルを 'Son Of A Bitch' にしたかったが、レコード会社に反対されたらしい。まだ75年頃は、「bitch」という単語はラジオや印刷物には使われなかったんだ。そこでメンバーは、シャレでこの言葉に近い響きのタイトルに変えた。'a son of a bitch' (雌犬の息子) は、'hair of the dog' (犬の相続人) でもあるが、これでは面白くないから同じ発音の 'hair of the dog' にしたという。迎え酒という意味もあるからね。主人公の男は、結局は女にフラれてバカ飲

みし、迎え酒を飲んだ、ということなんでしょうか(笑)。髪の毛のことを直接題材にした曲ではなかったね。

74年にボブ・マリーが3枚目のアルバム『ナッティ・ドレッド』をリリースした。このアルバムのタイトル曲は、こんがらがっている“deadlocks”を讀める曲だ。子供たちはドレッドロックスを誇りに思い、自分たちの文化を身につけよ、と訴える。

ボブはそれまで自身のバンド名をウェイラーズとしていたが、このアルバムからボブ・マリー&ザ・ウェイラーズに変えた。オリジナル・メンバーのピーター・トッシュとバニー・ウェイラーが脱げ、かわりに女性コーラス3人組のアイ・スリーズが加わった。ボブは73年にメジャー・レーベルのアイランドから『キャッチ・ア・ファイア』を発表、それまでジャマイカやイギリスでしか知られていなかった彼の名が世界中で知られ始めた。彼は、『キャッチ・ア・ファイア』での写真ではまだドレッドではなく、アフロに見える。2作目の『バーニン』でも、まだモサモサのアフロに見える。ドレッドになっているのは、3作目の『ナッティ・ドレッド』からだ。



Bob Marley & The Wailers
"Natty Dread"
Island [UK] ●ILPS9281
[1974] ◆Island [UK] ©314
548 895-2

incl. 'Natty Dread'

実は、ドレッドロックスのことも、ジャマイカのラスタファリアンの宗教のことも、俺は勘違いしていた。俺はインドで、ドレッドのような髪型をしているヒンズー教の'Sadhu' (苦行者) をたくさん見ていたし、ジャマイカの人たちはマリワナのことをヒンディー語のガンジャ(麻)と呼んでいたから、何か関係あるのかと思っていたんだ。何年後、ボブに興味を持ってジャマイカやラスタのことを勉強したら、ラスタのドレッドロックスは聖書に書かれた言葉に由来があると分かった。頭にハサミをつけるな、髪を切るなという教えだ。一方ガンジャは、ジャマイカがイギリス植民地だったため同じ英国の植民地だったインドから来た労働者がガンジャを持ってきていて、ヒンディー語の名で呼ばれていたそうさ。ドレッドという言葉の由来は、40年代に髪を伸ばしていたラスタファリアンのことを普

通のジャマイカ人が'dreadful locksmen'と呼んでいたことに遡る。'dreadful'は恐ろしい、'locks'は髪、'men'は男たち。それを短縮して、ドレッドロックスと言うようになったのだ。

今度は、アメリカのブラック・ミュージックの中に、髪の毛に関する歌がないか探してみよう。ペーシストのラリー・グレラムは、スライ&ザ・ファミリー・ストーンを脱けて、グレラム・セントラル・ステーションというバンド名で74年に自身のアルバムをリリースした。この『グレラム・セントラル・ステーション』の中に、『ヘア』という曲があった。この曲では、髪の毛の長さや色の違いをたとえに使って、千差万別な人間同士がお互いに寛容な心を持ち続けることの大切さについて歌っている。

ラリーの巧みなスラップ奏法のイントロ



Graham Central Station
"Graham Central Station"
Warner Bros. [US] ●BS2763
[1974] ◆ワーナー
©WPCR12914

incl. 'Hair'

が印象的なこの曲の歌詞は、こう始まる。《いつも人々に聞かれる。それは本当にあなたの毛なの?》。曲の主人公は質問に答える。《僕は言い返してやるんだ。もしそうじゃなかったとしても、僕に何ができないわけじゃない》。つまり、仮に自分の髪の毛ではないとしても、不自由があるわけではないと言っている。そして、『To judge a man by the length of his hair』

「僕は髪の毛の長さで人々を判断するのは公平じゃないと思うんだ」と歌われる。『Black or blonde nappy or fair, You can't judge nobody by hair』。黒でもブロンドでも、縮れていても薄くても、髪の毛では判断できないよ。

この時代の黒人のアフロ・ヘアは、すごく大きかった。それを表わすにはやはり大きざでたとえるのかと思ったら、この曲にも 'length' とあるように、アフロ・ヘアも長さで表現するらしい。ラリー・グレラムの「ヘア」を聴くと、ビリー・プレストンがかぶっていたバカでかいアフロのカツラを思い出すね。

最後は、保守的な南部に住む長髪の男がテーマだ。この歌を理解すると、南部では



The Charlie Daniels Band
"Fire On The Mountain"
Kama Sutra [US] ●KSBS2603
[1974] ◆Epic [US]
©EK34365

incl. 'Long Haired Country Boy'

ロング・ヘアが受け入れられるまでかなりの時間がかかったことがわかる。チャーリー・ダニエルズ・バンドの『ロング・ヘア・ド・カントリー・ボーイ』は、74年の『ファイア・オン・ザ・マウンテン』に入っていて、その翌年にシングル・カットされた。南部の様子はオリヴァー・ストーン監督の86年の反戦映画『プラトーン』でも表現されている。映画の中では、トム・ペレンジャー率いる南部の保守的で酒飲みの男たちとウィレム・デフォール率いるマリワナを吸うインテリの男たちとの違いが見える。ウィレム・デフォールは軍人だから、あまり髪の毛を伸ばしていないが、進歩的な人間だ。アメリカでは、ロング・ヘアが南部のカントリーの社会に広がるのは遅かった。それと同時にドラッグの文化も遅かった(サザン・ロック・バンドのオールマン・ブラザーズ・バンドやレイナード・スキナ

ードたちは、きつというんな面で否定されただろう)。

この曲では、保守的なカントリーの世界から出てきたチャーリー・ダニエルズが、ロックカーの世界に入っていく話が歌われている。南部に住んでいるのに長髪なのはけしからんと、周りから攻められると彼は歌う。僕を放っておいてくれ。あなたたちからは何も要求しない。自分で手に入れられないんだ。僕は欲しくなんかない。歌っている内容は、昔ながらの保守的な南部の人たちと変わらない。つまり、南部人のプライドという点では変わらないんだ。わずかに違うのは、髪の毛が長いことと、マリワナを吸うこと。最後のヴァースで、彼はこう歌う。『I don't want much of nothing at all, but I will take another toke』。僕は何も欲しくはないけど、一服のマリワナは吸うよ、とね。

こんなふうに、ヘア・スタイルは文化や土地柄、時代を表わしているんだ。ところが、今の時代は髪の毛をテーマにした曲はあまり歌われていないような気がする。かつてヘア・スタイルは、いち個人の社会的なステイメントだったけど、今はただのファッションだからね。